キャラクター名
儚　姫紗来（はかない　きさら

プレイヤー名

シンドローム	ブラム＝ストーカー エンジェルハィロゥ	ワークス	UGNエージェントD	カヴァー	UGN本部職員
オプショナル	ハヌマーン	年齢	18	性別	女性
覚醒	感染	衝動	妄想	初期侵食率	32 %
出自	天涯孤独	経験	大勝利	邂逅	恩人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	5	0	0			5
精神	2	0	0			2
社会	0	1	0			1

HP	24
行動値	15
(非装備時)	15
戦闘移動	20
全力移動	40

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	7		射撃			ＲＣ	1		交渉	1	
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	6	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

要人への貸し	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
神速の担い手	P	N		
遺産：エレウシスの秘儀	P　執着	N　憎悪		
剣の師匠	P　遺志	N　悔悟		
テレーズ・ブルム	P　信頼	N　隔意		
まじまさん	P　信頼	Nげろひげ		
謎の少女	P 好奇心	N　憐憫		
霧谷さん	P　誠意	N　嫌気		

最大財産P: 4	残り財産P： 3

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
先手必勝	1		常時					
効果：行動値+LV*3、侵蝕値+4								
戦いの予感	2	2	セット					
効果：ラウンド間行動値+Lv*10。シナリオ1回								
スピードスター	1	5	セット					
効果：ラウンド間攻撃力+【行動値】。自身がリアクション不可。シーン1回								
赫き剣	3	3	マイナー					
効果：任意のHPLv*2以下消費。攻撃力+消費HP＋８								
コンセ（ブラム）	2	2	メジャー					
効果：C値-Lv								
鮮血の一撃	4	2	メジャー					
効果：ダイス+Lv+1個。HP2消費								
渇きの主	2	4	メジャー					
効果：装甲無視。HPLv*4回復								
光の舞踏	1	2	メジャー					
効果：白兵を感覚で代用								
一閃	1	2	メジャー					
効果：全力移動+白兵攻撃。離脱不可								
ブラッドバーン	2	4	メジャー				80	
効果：攻撃力+Lv*4。HP5消費								
かぐわしき鮮血	★							
効果：								
軽功	★							
効果：								
効果：								

幼い頃両親を喪い、親戚をたらい回しにされ、両親との血縁があるのかもわからない一人の老翁に引き取られる。
しかし物心ついた頃には彼しかいなかったため、彼女はその老翁を親だと思い込んでいる。また老翁も自分が真の親ではない事を明かしていない。
彼女は「儚姫紗来（はかないきさら）」と名付けられる。
山奥に住む老翁と彼女は時代錯誤とも言える生活をしていた。そんな彼女にとって、娯楽といえば老翁の日課である。真剣を使った演武を見ることだった。
老翁は剣の達人だった。流れるような剣捌き、風をも斬る太刀筋、その音。それは幼い彼女でも見惚れるほど美しかった。

8歳の誕生日、老翁に剣を願った。
「お前は剣を持つ必要はない。いつか私の元を離れて、幸せに暮らしなさい」
そう諭されて剣を貰うことはなく、それでも食い下がり老翁自作の木刀を貰った。
それからというもの、毎日毎日木刀を振り続けた。老翁の演武を見様見真似で踊っていた。老翁は優しく微笑み、また悲しそうな眼をして彼女の成長を見守った。

彼女が15歳になった頃
老翁が珍しく誰かと話しているのを見かける。その夜
「すまないね。しばらく家を開けてしまうよ。お前はその間、何も心配せずいつも通りに暮らしておくれ」
そう彼女に言い残して家を出て行った。

数週間後、老翁は血塗れの傷だらけで帰ってきた。彼女は焦った。どうにか治療しないと、どうしてそんな大怪我なのか、混乱している彼女を老翁はただ抱きしめた。
「すまないね。お前の成長を最後まで見てあげることができなくて……。お前は山を出るんだ。知り合いの家に泊めてもらうよう話はしてある。私よりも優しい奴だ。だから安心していい……。願わくば、お前の花嫁姿を見たかったものだ……」